

## ブオナパルテの出現・形成・完成 — シャトーブリアンの『ブオナパルテについて、 ブルボン家の人々について』によりつつ —

駿 河 昌 樹

- 1 『ブオナパルテについて、ブルボン家の人々について』  
執筆頃の政治・軍事状況
- 2 『ブオナパルテについて、ブルボン家の人々について』  
執筆までのシャトーブリアンとブオナパルテの関わり
- 3 ブオナパルテという呼称
- 4 ブオナパルテの発生基盤、母胎としてのフランス革命
- 5 「自由」という言葉の擁護
- 6 ブオナパルテの出現
- 7 ブオナパルテの形成
- 8 ブオナパルテの罪と悪徳
- 9 ブオナパルテの完成と独裁原理

王政復古期 La Restauration に外交官や大臣を務めることになる文学者シャトーブリアン François-René de Chateaubriand は、王政復古直前の1814年3月30日、「彼の野心的な初のパンフレ pamphlet」<sup>(1)</sup> を出版した。

「パンフレ pamphlet」<sup>(2)</sup> は、政治的な風刺攻撃や誹謗、政治的誘導を旨とする文書で、政治と文学が直結している場合の多い19世紀までのフランスでは、文学者が、表現能力と教養と批判能力の粋を総合的に発揮してみせ得る重要なジャンルである。

この時のシャトーブリアンのパンフレは『ブオナパルテについて、ブルボン家の人々について、そして、フランスとヨーロッパの幸福のために我々の正統な王族たちの下に再集結する必要について *De Buonaparte, des*

*Bourbons, et de la nécessité de se rallier à nos princes légitimes, pour le bonheur de la France et celui de l'Europe*』で、様々な角度からのボナパルト批判、国家元首として迎え直すべきブルボン家の人々の価値と優越についての称揚、対フランス戦を継続中の同盟諸国連合軍への理解と好意の表明などが盛り込まれた。

形態は、内容に合わせ、ボナパルトについて、ブルボン家の人々について、対フランス同盟諸国連合軍についての三部構成となっている。

本稿では、このパンフレの中での多岐にわたるボナパルト批判のうち、ボナパルトの出現や形成、帝国の完成までの原理的な面を、やや抽象的にシャトーブリアンが考察した部分について検討したい。

## 1 『ブオナバルテについて、ブルボン家の人々について』 執筆頃の政治・軍事状況

このパンフレの執筆が開始された1813年12月から1814年1月頃は<sup>(3)</sup>、ボナパルト Napoléon Bonaparte が没落の一途を辿っていた時期である。とはいえ、旗幟鮮明に反ボナパルトを謳うパンフレは、執筆、印刷、出版の全過程を通して、シャトーブリアンの命に大きく関わる危険なものだった。

執筆時、「夜は鍵をかけて閉じ籠もり、枕の下に原稿を置き、弾を装填したピストル二丁を机に載せて」<sup>(4)</sup> 寝た、との記述が『墓の彼方からの回想 *Mémoires d'outre-tombe*』にはある。シャトーブリアン夫人 Madame de Chateaubriand も、「もしこの冊子を押さえられたら、どんな判決になるかは疑いがなかった。処刑台送りだった」<sup>(5)</sup> と回想している。

当時の状況を瞥見しておく。

ロシア遠征に失敗し、大軍勢を壊滅させられたフランスを前にして、各国から反ボナパルトの声が上がるようになった。プロイセン王国 Königreich Preußen の元首相カール・シュタイン Heinrich Friedrich Karl vom und zum Stein によって準備された第6次対仏大同盟 Sechster Koalitionskrieg、

Sixth Coalition に基づき、1813年3月、フランス帝国に対しプロイセンが宣戦布告、ドイツ解放戦争 Befreiungskriege が開始される。

ポナバルトは、ドイツ東部のリュッツェン Lützen の戦いとパウツェン Bautzen の戦いで、プロイセンとロシア Российская империя の連合軍を一旦破りはするものの、ドレスデン Dresden での6月26日の調停者メッテルニヒ Klemens von Metternich との会談で、オーストリア帝国 Kaisertum Österreich の対仏諸国同盟側への移行を促してしまう。同じ6月、スペイン España のヴィトリア Vitoria では21日にウェリントン Arthur Wellesley, 1st Duke of Wellington のイギリス（グレートブリテン及びアイルランド連合王国 United Kingdom of Great Britain and Ireland）軍に大敗を喫して全イベリア半島 Península Ibérica を失っており、大陸封鎖も終結、イギリスからのヨーロッパへの輸出が再開された。また、ナポリ王国 Regno di Napoli では、フランス元帥でもあり義弟でもあるミュラ国王 Joachim Murat が対仏諸国連合側に寝返った。

10月のライプツィヒ Leipzig での戦いでは、オーストリア、ロシア、プロイセンの同盟が復活した上にスウェーデン konungariket Sverige、シレジア Schlesien、ボヘミア Čechy も加わった対仏同盟諸国連合軍を相手に大敗を喫し、ライン川 Rhein まで後退、ザクセン Sachsen、バイエルン Königreich Bayern、ヴェルテンベルク Württemberg などの軍勢にも離脱される。フランス軍はオランダ Holland やネーデルラント Nederlanden からも撤退を余儀なくされる。フランクフルト・アム・マイン Frankfurt am Main で連合軍は和議を持ちかけるが、同盟諸国側内部での利害関係上の紛糾から（大陸列強のイギリス制海権嫉視、ポナバルト退位よりイタリア支配によるロシア抑止を望むメッテルニヒ等）、フランスの自然国境 frontière naturelle<sup>(6)</sup> 復帰へのポナバルト承認が遅れることになり、戦争が再開される。

ライン川を1813年12月に越えた対仏同盟諸国連合軍は、1814年には総勢約25万の兵力で（ポナバルト軍に残された兵力は約8万）、ワーズ Oise 溪谷

からイギリス・プロイセン軍（ビューローFriedrich Wilhelm von Bülow 指揮）、マルヌ Marne 溪谷からプロイセン軍（ブリュヒャーGebhard Leberecht von Blücher 指揮）、オーブ Aube 溪谷からオーストリア・ロシア軍（シュヴァルツェンベルク Feldmarschall Karl Philipp Johann Nepomuk Joseph Fürst von Schwarzenberg 指揮）がフランス領内に攻め込み、パリへ進軍中だった。

とはいえ、1796年のイタリア戦役で勝利を取めた時のような、ボナパルトの得意とする電撃戦にふさわしい配置が出現し、2月18日までにブリュヒャー軍とシュヴァルツェンベルク軍を撃退してしまう。連合軍側はこの敗北を機に交渉に入る。シャティヨン会議 Congrès de Châtillon では、フランス代表のコランクール Armand Augustin Louis de Caulaincourt に、1792年時点のフランス国境への復帰提案さえ持ち掛けられている。

しかし、軍事的な状況の好転に自信を持ったボナパルトはこれを拒否し、会議は決裂する。22日、イギリス政府は、ボナパルトとの交渉を今後一切放棄する宣言をする。

この後、ブリュヒャー軍がふたたび攻勢に転じ、双方の軍ともに進退をくり返すが、ソワソン Soissons 市の降服後、連合軍を制圧するのは困難となった。ボナパルトはロレーヌ Lorraine 地方に向かい、分散している守備隊を集めて、連合軍とドイツの連絡を絶つ作戦に出たが、パリの実権を委ねられていた皇妃マリ・ルイーゼ Marie-Louise に宛てた飛脚が連合軍に捕えられて作戦を知られ、ロシア皇帝アレクサンドル1世 Александр Iはパリへの直接進軍を開始する。パリは防備を施しておらず、マリ・ルイーゼはパリを放棄、陸軍中將に昇進した兄のスペイン王ジョゼフ・ボナパルト Joseph Bonaparte もパリ防衛をしなかった。クリシー Clichy やナスイヨン Nation の市門で若干の戦闘があったが、1814年3月30日、パリは降伏した。

『墓の彼方からの回想』でシャトーブリアンは、この時に彼が秘密裏に印刷を頼んだ印刷業者は、「刻々入ってくる情報に従って、活字を組んでいる途中のゲラ刷りを私に戻しに來たり、大砲の音がパリに近づいたり遠

ざかったりするのにあわせて、再び持って行ったりした。こんなふうにも二週間ほどの間、私は自分の命で、コインの裏表を出して遊ぶようなことをした」<sup>(7)</sup>と書いているので、3月半ばにはパンフレはほぼ書き上げられており、後半の二週間ほどで校正や印刷にかかっていたものと思われる。

## 2 『ブオナパルテについて、ブルボン家の人々について』 執筆までのシャトーブリアンとブオナパルテの関わり

シャトーブリアンはボナパルトと無関係であったわけではなく、むしろボナパルトとの併走によって19世紀初頭における文学的寵児となった経緯がある。革命によって失われた法王庁とフランスとの和解を目論み、コンコルダ Concordat 調印を1801年7月15日に済ませた第一執政ボナパルトにとって、シャトーブリアンが1802年に出版した『キリスト教精髓 *Génie du christianisme*』は格好の書物だった。朗唱されるのに適した音韻配置の、流麗、明晰な情緒喚起的文体によってキリスト教の美質を説いた『キリスト教精髓』は、コンコルダ調印後のフランス社会において、キリスト教を柱に習俗と社会道徳の復興を推進させるのに有効であるとともに、王党派の取り込みにも一役買うものと見なされた。

シャトーブリアンは、1803年5月、ボナパルトとの会見後、ボナパルトの母方の叔父であるフェッシュ枢機卿 le cardinal Fesch 付きのバチカンの公使館秘書に任命され、6月にローマに赴く。ロシアからは大公の教育係としての依頼を受け続けていたが<sup>(8)</sup>、11月にはボナパルトより、スイスのヴァレ共和国 République du Valais (またはローヌ共和国 République rhodanienne と呼ばれる) への代理大使に任命され、1804年2月にはヴァレ共和国より、フランス大臣職への就任を要請された。

ヴァレは、ローマ帝国によって征服された後、ブルゴーニュ王国の一部となり、この地のアゴヌ大修道院 L'abbaye d'Agaune はキリスト教の重要な拠点となった。17世紀にはアドリアンⅡ・ド・リドマッテン Adrien

Il de Riedmatten の働きにより、プロテスタント運動に抵抗。1798年にフランスに占領され、1802年、ボナパルトはここを、ロース共和国 République rhodanienne の名の下に独立国家として建国し、次いで、シンプロン Simplon 県としてフランスに併合する。ボナパルト退位後の1815年には、22番目の州としてエルヴェシウス（スイス）連邦 Confédération helvétique に組み込まれることになる。

しかし、1804年3月21日、“最後のコンデ公”であるアンギャン公爵、ルイ＝アントワヌ＝アンリ・ド・ブルボン Louis-Antoine-Henri de Bourbon, duc d'Enghien の不当な処刑事件が起き、王党派のシャトーブリアンは抗議のため公職を辞任する。抗議のためだが、直に生命の危険が生じるのを避け、当時の時点では他の理由をつけた。

シャトーブリアン側からの主要な個人的な行き来を瞥見するだけでも、『ボナパルテについて、ブルボン家の人々について』執筆までには、この程度の関わりが両者の間にはあった。

もちろん、作家シャトーブリアンにとって、ボナパルト独裁により、「フランス革命の基本原則であった言論・出版・集会などの公的諸自由が完全に抑圧されるにいた」<sup>(9)</sup>り、「あらゆる政治新聞が禁止され、検閲は出版物だけでなく演劇やシャンソンにまで及び、どのような形態の知的活動、どのような表現方法も帝国警察の監視と行政当局の統制を逃れることができ」<sup>(10)</sup>ず、「集会や結社の自由が存在しなかった」<sup>(11)</sup>という状況が好ましかったわけではない。

### 3 ブオナパルテという呼称

この文書中でシャトーブリアンは、コルシカ島出身のボナパルトを、イタリア語の本名であるナポレオーネ・デ・ブオナパルテ Napoleone de Buonaparte の姓で呼ぶことに終始し、フランス人の血を共有しない外国人であることを強調している。出自が露わになるため、皮肉にもボナパル

トは、このイタリア語の本名で呼ばれるのを生涯嫌ったというが、真の姓名に対して抱いたこうしたボナパルトの自己嫌悪を意識しつつ、フランス人から見たコルシカ島民への潜在的な差別を呼称に込めて、シャトーブリアンは叙述を進める。

書き始められてからしばらくは、ブオナパルテという名さえ用いられず、「あの男 *Celui*」と呼び、「彼 *il*」と呼び、あるいは「あの気狂い *cet insensé*」と呼んでいる。

ボナパルトに対するシャトーブリアンの侮蔑を共有するわけではないものの、これより以下、ボナパルトを呼ぶのに、この文書中の呼称として使用頻度の高い「ブオナパルテ」を用いることにする。

じつは、後年、シャトーブリアンは膨大な紙数を費やしつつ、30年以上をかけて言語表現による「ボナパルト」像を完成させていくことになる。それは『墓の彼方からの回想 *Mémoires d'outre-tombe*』の第3部として結実するが、そこでは、「ボナパルト」はブオナパルテとはすでに呼ばれず、「ナポレオン *Napoléon*」ないしは「ボナパルト」と呼ばれている。30年以上に亘る「ボナパルト」像の言語的彫刻・彫琢の過程は、同時代の巨人だった「ボナパルト」への複雑な愛憎と、その人間的な全体像への深い関心とを彼のうちに根付かせたものと思われる。今回検討する『ブオナパルテについて、ブルボン家の人々について』に描かれたブオナパルテ像は、彼が後年描く「ボナパルト」像とは異なる、まさに1814年の帝政崩壊時点、第一次王政復古直前の時点でのブオナパルテ認識ということになる。

#### 4 ブオナパルテの発生基盤、母胎としてのフランス革命

「あの気狂いのやらかした諸々の過ちをどう説明したらよいか？」

Comment expliquer les fautes de cet insensé?<sup>(12)</sup>

シャトーブリアンがブオナパルテの批判的検討に取り掛かるのは、この

短い問いによってだが、この問いは、様々な要素が複雑に混ざり合った結果発生したブオナパルテという現象を、山の頂上からひと掴みに概括しようとするのに似ている。ここでは「les fautes」を便宜的に「過ち」と訳したが、この語は、「道徳的な過ち」や「罪」から、「間違い」や「誤り」、「責任」や「落ち度」、「法的な過失」や「違反」までを意味するため、シャトーブリアンのここでの用法が多義的であるのは間違いない。

彼はすぐにフランス革命の概括に入るが、これは、ブオナパルテが「革命の子 l'enfant de la révolution」<sup>(13)</sup> だからである。フランス革命はブオナパルテの発生基盤であり、母胎である。1814年時点のシャトーブリアンは、フランス革命をどう見ていたか。

「習俗の墮落と精神の逆上（／錯乱）によって準備された革命が、我々の中で勃発する。法の名において、宗教と道徳が覆される。父祖たちの経験や慣習が捨てられ、あらゆる政体の神聖な基盤である先祖の墓が破壊されて、不確かな理性の上に過去も未来もない社会が創建される。我々は自らの狂気の中をさ迷い、正義と不正義や、善と悪についてははっきりした考えをすっかり失って、共和政体の様々な形態を駆け巡った。ローマ帝国の民ならばテヴェレ川の流れにまず身を濯ぎ、武器を置いてから、はじめてフォーラムで議論したような重要なテーマについて、パリの市街の真ん中で、下層民たちが議論するのを我々は求めた。彼らの巣窟からは、こうして、貧しさのゆえに半裸で汚れ、愚鈍になり、また、仕事のゆえに醜くなり片輪になった、あれらすべての王たちが這い出してきた。彼らの美德といったら、貧窮ゆえの傲慢さや、ほろ着自慢ぐらいしかない。国はこうした連中の手に落ち、すぐに傷で覆われてしまった。我々の憤激や空想から何が残ったというのか？ 犯罪と鎖だけである。」

Une révolution, préparée par la corruption des mœurs et par les égarements de notre esprit, éclate parmi nous. Au nom des lois, on renverse la religion et la morale; on renonce à l'expérience et aux



coutumes de nos pères; on brise les tombeaux des aïeux, seule base solide de tout gouvernement, pour fonder sur une raison incertaine une société sans passé et sans avenir. Errant dans nos propres folies, ayant perdu toute idée claire du juste et de l'injuste, du bien et du mal, nous parcourûmes les diverses formes du gouvernement républicain. Nous appelâmes la populace à délibérer au milieu des rues de Paris, sur les grands objets que le peuple romain venoit discuter au Forum, après avoir déposé ses armes et s'être baigné dans les flots du Tibre. Alors sortirent de leurs repaires tous ces rois demi-nus, salis et abrutis par l'indigence, enlaidis et mutilés par leurs travaux, n'ayant pour toute vertu que l'insolence de la misère et l'orgueil des haillons. La patrie, tombée en de pareilles mains, fut bientôt couverte de plaies. Que nous resta-t-il de nos fureurs et de nos chimères? Des crimes et des chaînes!<sup>(14)</sup>

シャトーブリアンがフランス革命に見出すのは、第一に破壊であり、次に、「議論」にもふさわしくなく、「国」を手中にするにもふさわしくない「下層民たち」の「這い出し」の光景である。

破壊され、捨てられるものは、「宗教と道徳」、「父祖たちの経験や慣習」、「あらゆる政府の神聖な基盤である先祖の墓」など、シャトーブリアンにとって重要なものばかりであり、フランス革命の実体験から掘み出されてきた、破壊と滅亡に抵抗するための観念の一部でもあって、『革命試論 *Essai sur les révolutions*』や『アタラ *Atala*』、『キリスト教精髓』以来、思考と創造の核として彼が使い続けてきているものでもある。

「宗教と道徳」を覆す「法」や、「過去も未来もない社会」の基盤となる「不確かな理性」という見方には注目しておく必要がある。「une raison incertaine」は、フランス語訳読の際の慣用を考えれば「理性の不確かさ」と訳してもよく、シャトーブリアンにおいて「法」や「理性」はポジティブなものとは受け取られていない。ネガティブなものとは決めつけているわ

けでもないが、用いられ方によっては貴重な「宗教や道徳」を破壊したり、「父祖たちの経験や慣習」や「あらゆる政体の神聖な基盤である先祖の墓」を押しやっ、て、「過去も未来もない社会」の基盤となってしまうものとして扱っている。18世紀に過大に称揚され、有効な知的武器として認識された「法」や「理性」が、使用者以外のあらゆる他者や自然を搾取するための道具として研ぎ澄まされる時、いかに危険な事態を招来するか。これを革命期につぶさに観察したシャトーブリアンは、後にフランクフルト学派 Frankfurter Schule が「道具的理性 Instrumentelle Vernunft」と呼ぶところの認識におのずと達していたといえる。

他方、革命を準備することになった「習俗の墮落と精神の逆上（／錯乱）」についてシャトーブリアンが追及していかない点も看過するわけにはいかない。

なるほど、この部分の記述が、革命の概観を手早く行うためのものという理由はあり得る。しかし、少なくともアンシャン・レジーム Ancien Régime の制度疲労から生じたものではあるはずの「習俗の墮落」に、シャトーブリアンが特権的に価値づけて用いがちな観念である「宗教と道徳」、「父祖たちの経験や慣習」、「あらゆる政体の神聖な基盤である先祖の墓」などから生じてきた面がないとは言えない。同時代人のサド侯爵 Marquis de Sade が提示したように、「宗教と道徳」はつねに、背徳や悪徳や異常を伴うことでのみ機能する、それ自体異常な装置である。社会と18世紀人の心性を構成していた重要な要素であるこれらが、「習俗の墮落」を醸成しなかったはずはないと考えておかねばならない。

おそらく、シャトーブリアンが考究すべきだったのは、「習俗の墮落」がなぜ発生するのかという原理論であり、また、「習俗の墮落」が発生してしまっ、た後ではどのような改革が可能か、あるいは無効か、等であったらう。いうまでもなくルソー Jean-Jacques Rousseau 的なテーマで、シャトーブリアンはこの点を、自分よりもはるかに構造的・原理的な思索力を持つ先達のルソーに任せつつもりだったかもしれない。青年期にルソ

一主義者であったシャトーブリアンは、少なくともその程度にはルソーの業績に馴染んでいる。

シャトーブリアンが「習俗の墮落」、ないしは組織や体制の「墮落」というテーマをより大がかりに扱ったのは、自分が間近で観察しえたナポレオン帝政期の考察と、政権内の当事者のひとりとして内部で経験したルイ18世 Louis XVIII (Louis Stanislas Xavier de France, comte de Provence) とシャルル10世 Charles X (comte d'Artois) の王政復古期の考察とにおいてということになるだろうが、生来、形式論理を重んずる詳細な分析的考察力より、ラ・ロシュフーコー La Rochefoucauld やラ・ブリュイエール La Bruyère のようなフランス・モラリスト moralistes français の箴言的思考力を強く備え、ルイ14世 Louis XIV の時代を回想録に詳細に活写したサン＝シモン公爵 Duc de Saint-Simon のように、人物たちの具体的な動静を追い活写することでドキュメンタリー的・物語的に浮き彫りにしていくタイプの批判能力も備えていたシャトーブリアンの場合、成果は、アンシャン・レジーム期から革命期を経て1840年代までのヨーロッパ政界の多数の著名人たちを活写した批評的絵巻大全『墓の彼方からの回想』にまとめ上げられることになる。

「精神の逆上（／錯乱）」と彼が呼ぶものは、この文書の文脈からいって、ブルボン家を頂く君主制を否定する共和政体支持の「精神」の跋扈だろうが、しかし、これは君主制主義者のシャトーブリアンならあたり前の認識、と見て単純に済ますわけにはいかない。

数世紀に及ぶ知の進化過程から自然と現われ出てきた比較政体批判の態度を、シャトーブリアンはよく知っている。処女作『革命試論』で科学の発達について言及しているばかりか、フランス革命前夜、家族として兄の義父であるマルゼルブ Malesherbes と親しみ、様々な知的テーマについて談論風発の日々を送った際にも話題にならなかったはずはない。ギヨーム＝クレチャン・ド・ラモワニオン ド・マルゼルブ Guillaume-Chrétien de Lamoignon de Malesherbes はアンシャン・レジーム期の行

政官、植物学者であり、ルイ15世死去後は、チュルゴ Anne-Robert-Jacques Turgot とともにリベラル派の雄と目された。租税法院院長、出版統制局長、宮内大臣、国璽秘書、無任所大臣などを歴任。出版統制局長時代には、ディドロ Didrot の百科全書を出版させるのに尽力し、ルソー、ワシントン George Washington、フランクリン Benjamin Franklin ら啓蒙派とも親交があった。

ルネサンス期から始まった知の探求が17世紀にさらに科学的に拡大深化し、18世紀には様々な領域の知が百科全書派などによって集められ、知的な整理と解説を施された上で検索と再利用の可能な状態で公開される。そうした知的情報革新をベースに、知的情報相互の間に自ずとネットワークが生じ、それまで想定もされなかったような発見や知的概念の創出が発生してくる経緯を、シャトーブリアンは当然承知している。モンテスキュー Charles-Louis de Montesquieu やルソー、アリストテレス Ἀριστοτέλης に通じている彼が、「精神の逆上（／錯乱）」という簡単過ぎる表現を採ることには、反ブオナパルテの機運の高まる情勢に裒差す政治パンフレにおいてならではの計略もある、と考えておくべきだろう。

## 5 「自由」という言葉の擁護

革命概観が語られた直後に来る次の記述は、どう理解されるべきだろうか？

「しかしながら、少なくとも、当時我々を導いていたと見えたあの言葉は、高貴なものではあった。自由（という言葉）が、その名の下に犯された大罪の数々によって責められるようなことがあってはならない。真の哲学は、偽賢者たちがまき散らす汚染された諸々の教義の母ではない。経験によって啓蒙されることで、我々はようやく（／ついに／最後に）、君主政体が、我々の国に適する唯一の政体だと気づいた（／理性的に判断した）

のである。」

Mais du moins le mot qui sembloit nous conduire alors étoit noble. La liberté ne doit point être accusée des forfaits que l'on commit sous son nom; la vraie philosophie n'est point la mère des doctrines empoisonnées que répandent les faux sages. Eclairés par l'expérience, nous sentîmes enfin que le gouvernement monarchique étoit le seul qui pût convenir à notre patrie.<sup>(15)</sup>

革命当時「我々を導いていたと見えた」言葉には、いうまでもなく、平等 L'égalité や連帯・友愛 La fraternité も含まれる。このふたつを除いて、自由 La liberté だけを此处で擁護するのはなぜか。

ここでは明らかに、出版や表現の自由を奪ったブオナパルテ専制の批判のため、あえて「自由」だけが浮き彫りにされている。ブオナパルテ体制下で最も失われたものとしての「自由」を、他ならぬブオナパルテの「発生基盤、母胎」であるフランス革命から取り出してきている。「自由（という言葉）が、その名の下に犯された大罪の数々によって責められるようなことがあってはならない」という表現は、「自由」なきブオナパルテ体制下で「犯された大罪の数々」は「責められる」べき、というアイロニカルな拡張思念を容易に想起させる。シャトーブリアンのレトリックである。

「真の哲学は、偽賢者たちがまき散らす汚染された諸々の教義の母ではない」という表現は、18世紀思想の精華を、フランス革命の行動家たちという「偽賢者たち」と分断しようとしている、と見ておくべきだろう。革命の惨禍とブオナパルテ専制の悲惨を批判しようとする時、王制側に軸を置いて考察する者は、18世紀啓蒙思想全体を安易に批判する愚に陥りやすい。ここにシャトーブリアンは楔を打っている。モンテスキューやルソー、それらよりも遙かにシャトーブリアンと親和性の高いヴォルテール Voltaire の精神や活動を否定すれば、そもそもシャトーブリアンの精神は在りようを失ってしまう。

ブオナパルテ体制に抗して、革命であれほどの犠牲を払ってまで手に入

れた「自由」を取り戻そうというのがシャトーブリアン主張だが、これはもちろん、共和派に向けられてもいる。革命の鬼っ子であるブオナパルテ専制は、王党派にとっても共和派にとっても等しく敵で、ブオナパルテ派以外のすべてを糾合しようとの意図が見える。

革命期スローガンの重要な柱であった「自由」の救い出しの試みの後で、「経験によって啓蒙されることで、我々はようやく（／ついに／最後に）、君主政体が、我々の国に適する唯一の政体だと気づいた（／理性的に判断した）のである」と続けていくのは、一見わかりづらいが、おそらく、フランス文によく見られるレトリックのひとつと見るべきで、「自由」という概念の発見には大きな価値があり、擁護され続けるべきだが、しかしながら、苛酷で悲惨な、多くの貴重な」といった言外の意を暗に付け加えながら、「経験によって啓蒙されることで、我々はようやく（／ついに／最後に）、君主政体が、我々の国に適する唯一の政体だと気づいた（／理性的に判断した）のである」と理解されていくべき部分であろう。あれほどの惨禍を出した革命でスローガンとされ、希求された「自由」の実現のためには、「君主政体」こそが、「我々の国に」において最も「適する唯一の政体」である、という趣旨を読み取っておくべきである。

いずれにしても、シャトーブリアンはここで、フランス革命の精髓でありブオナパルテ体制下で損なわれた「自由」を、ブオナパルテ体制に抗する強力な武器として持ち出してきており、それを、当面の政治状況において最も現実的で有効な代替政体であり、これもまたブオナパルテ体制に抗する強力な武器である「君主政体」に接続していこうとしている。君主政体を破壊した革命の精髓である「自由」を取り込み、いわば君主政体の遺伝子組み換えを行って、新時代に向けて変質・蘇生を図ろうとすること、革命さえも君主政体の過去の一期と位置づけ、伝統のひとつとして吸収しようとする。ネオ君主制の構想家としてのシャトーブリアンが出現してくる瞬間を、このパンフレは刻印していると見てよいだろう。

こうしたネオ君主政体論は、ブルジョワジーにはどう映りうるか。彼ら

は、革命期においては、「ルソーの弟子ではあったものの、科学や経済の教養はほぼゼロで、エルヴェシウス Claude-Adrien Helvetius のような哲学者の物質主義を恐れていた」<sup>(16)</sup> ロベスピエール Maximilien François Marie Isidore de Robespierre や、「われわれの目的は、善に向う一般の傾向が確立されるように、物事を秩序立てることである」<sup>(17)</sup> などと政治の場で得々と語るサン＝ジュスト Louis Antoine Léon de Saint-Just らによって抑圧され、また、ブオナパルテ体制下においては、そもそもが不条理なものだった大陸封鎖令 Décret de Berlin によって、歴史的にイギリスとの緊密な貿易関係の上に発展してきていた大陸諸国、すなわち、オランダ、ハンザ都市、スペイン、イタリア、プロイセン、西南ドイツ、ロシアなどの産業の停滞とそのゆえの経済的損失を経験させられ、イギリスも含めた広域での投資や産業企画、貿易の拡大なども禁じられ、実地でのイギリスの産業の視察や研究も禁じられていた。フランス産業の飛躍的な機械化、労働者数の確保・拡充、その他経済産業面全般での合理化や進歩を懇望する彼らブルジョワジーには、政府や党派からの抑圧や規制が極力少なく、自由無碍な経済活動が許され、いずれもキリスト教の王国であるヨーロッパ諸国とのスムーズな通商を可能にしてくれる政体こそが望ましかっただろう。

## 6 ブオナパルテの出現

「君主政体が、我々の国に適する唯一の政体だと気づいた（／理性的に判断した）」時点で、「我々の正統な王族たち nos princes légitimes」を呼び戻すべきであっただろう、とシャトーブリアンは言うが、国民は、犯した過ちが許されるにはあまりに大きいと考え、命や財産を案じて、それを実行できなかった、と続けている。

自分が間違いを犯したと認めるのは、人間の orgueil<sup>(18)</sup>、すなわち慢心（／高慢／思い上がり）にとってはあまりにつらい。あれほどの殺戮や大混

乱、不幸の後で、そもそもの出発点に、振り出しに戻ることにもなってしまう。しかも、人びとはまだ「我々の不幸の主要な原因である、あの平等という妄想 *cette égalité chimérique, cause principale de nos maux*」を諦めることができないでいる。このため、「社会一般の幸福は個人的な打算のために犠牲にされ、正義は虚栄のために犠牲にされ *la félicité publique fut sacrifiée à l'intérêt personnel, et la justice à la vanité*」ることになり、王族の呼び戻しは実現されなかった、というのがシャトーブリアンの見解である。

彼の見方に従えば、ブオナパルテの出現はここに準備されることになる。

「こうして、革命の子であるとともに、その内部では法が根源から腐っており、腐敗（／墮落／退廃）を擁護し、腐敗（／墮落／退廃）と結びついているような最高位の長を打ち立てることが考えられねばならなかった。廉潔で、揺るぎなく、勇敢な行政官たちや、誠実さでも才能でも評判高い指揮官たちは、我々のあの不和の最中にあっても成長してきていたが、彼らには権力ひとつさえ委ねられなかった。そうされたとしても、他ならぬ彼らの道徳的信条が、権力を受けとることを自らに禁じたことであろう。フランス人の中に、ルイ16世の冠をあえて押し戴こうというような額を見つけるのは、絶望的だった。そこへひとりの外国人が躍り出て、選ばれたのである。」

Il fallut donc songer à établir un chef suprême qui fût l'enfant de la révolution, un chef en qui la loi corrompue dans sa source, protégeât la corruption, et fît alliance avec elle. Des magistrats intègres, fermes et courageux, des capitaines renommés par leur probité autant que pour leurs talents s'étoient formés au milieu de nos discordes; mais on ne leur offrit point un pouvoir que leurs principes leur auroient défendu d'accepter. On désespéra de trouver parmi les Français un front qui osât porter la couronne de Louis XVI. Un étranger se presenta: il fut choisi.<sup>(19)</sup>



シャトーブリアンによれば、こういうことになる。

君主政体こそがフランスに適した唯一の政体であるとフランス人は気づいたにもかかわらず、革命を起こしたという過ちを認めたくないという慢心（／高慢／思い上がり）のために、「我々の正統な王族たち」を呼び戻さなかった。しかも、なおも「我々の不幸の主要な原因である、あの平等という妄想」をフランス人は持ち続けている。こうして、「社会一般の幸福は個人的な打算のために犠牲にされ、正義は虚栄のために犠牲にされ」続けていく。王族たちを呼び戻すことが「社会一般の幸福」に通じ、「正義」に通じるはずだが、「個人的な打算」や「虚栄」から、それはなされないままに終わる。

このため、社会の「法」は「根源から腐って」いる状態であり、「平等という妄想」で錯乱し続けている状態でもある。

こうした社会を統べる長を選ぶとすれば、当然、「腐敗（／墮落／退廃）を擁護し、腐敗（／墮落／退廃）と結びついている」者でなければならないし、国民同様に「平等という妄想」のために理性を失っている者であるか、国民を欺くために「平等という妄想」を敢えて称揚する者でなければならない。

まさに、この条件に合致して現れた者がブオナパルテだった、ということになる。

## 7 ブオナパルテの形成

1799年、シエイエス（またはシエース）Emmanuel Joseph Sieyès とともに起こしたブリュメール18日のクーデターで総裁政府 Directoire を追放し、執政政府 Consulat を樹立した際、「我々は共和国を求める。平等、道徳、市民としての自由、そして政治的寛容に基盤を置く共和国である mais nous voulons la république; la république assise sur les bases de l'égalité, de la morale, de la liberté civile et de la tolérance politique, etc.」<sup>(20)</sup>と語っ

ていたブオナパルテだが、後に露わになってくるような計画は、はじめの頃は公然と告げられることはなかったし、「見せかけだけの偉人 un faux grand homme」としての諸性格も少しずつしか現われてはこなかった、とシャトーブリアンは言う。

「執政という控えめな称号の下で、彼はまず、権力を譲り渡すことを恐れないよう、独立心旺盛な精神たちに慣れさせた。秩序や法や宗教の再建者であると言明することで、真のフランス人たちを味方につけた。最も賢い者たちでさえ籠絡され、最も洞察力のある者たちでさえ騙された。共和主義者たちは、ブオナパルテを、自分たちが生み出したものと見なし、自由な国家の民衆のリーダーとも見た。王政主義者たちは、彼がモンク<sup>(21)</sup>の役割を演じているのだと考え、我先に彼に仕えようとした。誰もが彼に期待していた。フランス人たちの勇敢さによる輝かしい戦勝の数々が、彼を栄光で取り巻いた。そうして彼は自身の成功に酔い、悪への性向を現わし始めた。」

Sous le titre modeste de consul, il accoutuma d'abord les esprits indépendants à ne pas s'effrayer du pouvoir qu'ils avoient donné. Il se concilia les vrais Français, en se proclamant le restaurateur de l'ordre, des lois et de la religion. Les plus sages y furent pris, les plus clairvoyans trompés. Les républicains regardoient Buonaparte comme leur ouvrage et comme le chef populaire d'un Etat libre. Les royalistes croyoient qu'il jouoit le rôle de Monk, et s'empressoient de le servir. Tout le monde espéroit en lui. Des victoires éclatantes, dues à la bravoure des Français, l'environnèrent de gloire. Alors il s'enivra de ses succès, et son penchant au mal commença à se montrer.<sup>(22)</sup>

もともと、「腐敗（／墮落／退廢） la corruption」を内蔵するフランス革命を「発生基盤、母胎」としていたブオナパルテだが、ここでは、そこか

ら生まれた「身体」の成長の最初期の様子が簡潔にまとめられている。

ただひとりの人間への権力の譲渡や、「秩序や法や宗教」の再建は、構造上は王政への回帰そのものである。共和主義者たちが「ブオナパルテを彼らの作品と見な」すのは、平等の放棄や、一所への権力の集中的収奪の許可を伴っているがゆえに皮肉で滑稽だが、揺らいでいた「秩序や法」の急がれる再建が、彼らの目を瞑らせる。

平等が放棄され、権力が唯一者に集中されたところに秩序が生まれるのでよいのならば、そもそも、ブルボン家による王政のアンシャン・レジームでよかったはずだが、革命以後のブオナパルテ体制とアンシャン・レジーム期とでは、ひとつ決定的に違うものがある。それは、バステュー Bastille 襲撃に向かった時のような民衆の自由行動の有無である。革命期には、民衆は解放されるどころか、体制の歯車としてしか動けないように管理されたが、ブオナパルテ体制下では、とりわけ過酷な徴兵制によって、これがさらに強化され、管理と監視、強制、抑圧、苦役、時には金品の取り立てが民衆層に徹底される。いわば、「民衆」や「民」を壊滅する過程が革命とブオナパルテ体制であり、民衆は国家装置の頭数としての「人民」に、また「国民」にされていった。

遊んでいる自分の息子を見ながら「司教様、“これ”が魂を持っているなどとお思いか？」<sup>(23)</sup>と尋ねるほど人間機械論<sup>(24)</sup>に染まっていたらしいブオナパルテは、田舎から徴兵した兵隊たちを「大砲用の肉 chair à canon」<sup>(25)</sup>と呼び、戦場で敵の砲弾が最も落ちやすいところに配備して敵に狙わせることで、敵の砲弾を蕩尽させる方法を取った、とシャトーブリアンは伝えている。「政治とは人間ゲームである」<sup>(26)</sup>と、ブオナパルテは定義していた。

## 8 ブオナパルテの罪と悪徳

ブオナパルテが「自身の成功に酔」ったかにシャトーブリアンに見えたのは、終身執政になり（1802年8月2日）、アミアン条約 *Traité d'Amiens*

を破棄してイギリス本土上陸作戦を立て始める頃（1803年5月16日）のことだろう。その頃から「悪への性向を現わし始めた」と書くものの、それでもシャトーブリアンは、ブオナバルテが本来的に悪そのものだったと考えているわけではない。

「この男の罪が、“行い得たはずなのにに行わなかった善”によるのか、それとも、それ以上に、“行った悪”によるのか。未来では、これがわからなくなってしまうだろう。ひとりの篡奪者に、これほど果たすのに容易で輝かしい役割が与えられた試しは、一度としてなかった。わずかでも節度を持ちあわせていれば、彼は、自分と自分の民族を全世界の最高の王座に就かせることができただろう。誰ひとり王座を彼と争う者はなかったのだし、革命以降に生まれた世代は我々の古の主人たちを少しも知らず、混乱と不幸しか目にしていなかった。フランスもヨーロッパも倦んでいた。休息だけが熱望されていた。もしそれが買えるものなら、どんな値であれ買い求められたことだろう。だが、神は、篡奪者が王位継承の秩序を乱して英雄たちの後継者となり、一日にして、神と栄光と時間の遺産を利用するという、かくも危険な例が世界に与えられてしまうのを望まなかった。篡奪者というものは、生まれながらの権利を欠いているため、自分の徳性によってしか王位の要求を正当化できない。ブオナバルテの場合、徳性に当たるものとしては、軍事の才能以外なにひとつ持ちあわせていなかった。それとて、我々の何人もの将軍たちのほうが、ブオナバルテを凌いでいたかもしれないのである。神にとっては、彼を失墜させるにあたり、彼を見捨て、彼自身の狂気に彼を委ねれば十分だった。

人々の間で善意が失われてしまうような場合でも、それは王たちの心の中に見出され直すようではなければならない、とフランスの王のひとりと言っていた。なによりブオナバルテには、王の魂という、この必須の特質が欠けていた。」

L'avenir doutera si cet homme a été plus coupable par le mal qu'il a

fait que par le bien qu'il eût pu faire, et qu'il n'a pas fait. Jamais usurpateur n'eut un rôle plus facile et plus brillant à remplir. Avec un peu de moderation il pouvait établir lui et sa race sur le premier trône de l'univers. Personne ne lui disputoit ce trône: les générations nées depuis la révolution ne connoissoient point nos anciens maîtres, et n'avoient vu que des troubles et des malheurs. La France et l'Europe étoient lassées; on ne soupiroit qu'après le repos; on l'eût acheté à tout prix. Mais Dieu ne voulut pas qu'un si dangereux exemple fût donné au monde, qu'un aventurier pût troubler l'ordre des successions royales, se faire l'héritier des héros, et profiter dans un seul jour de la dépouille du génie, de la gloire et du temps. Au défaut des droits de la naissance, un usurpateur ne peut légitimer ses prétentions au trône que par des vertus: dans ce cas, Buonaparte n'avoit rien pour lui, hors des talens militaires, égalés, sinon même surpassés par ceux de plusieurs de nos généraux. Pour le perdre, il a suffi à la Providence de l'abandonner et de le livrer à sa propre folie.

Un roi de France disoit que si la bonne foi étoit bannie du milieu des hommes, elle devoit se retrouver dans le cœur des rois: cette qualité nécessaire d'une âme royale manqua surtout à Buonaparte.<sup>(27)</sup>

ブオナパルテには、なるほど「行った悪」が存在するものの、「行い得たはずなのに行わなかった善」もあると考えるシャトーブリアンにとって、ブオナパルテは必ずしも本質的な悪人なのとは言えない。

そういう男が「罪」を犯してしまったのは、なによりも「善意」、すなわち「王の魂という、この必須の特質」の欠如だった。篡奪者として王位の要求をしたとしても、この「善意」があればよかっただろうが、これを欠いていたため、他の「徳性」に頼る他なかった。ブオナパルテの場合、それは「軍事の才能」だったが、「それとて、我々の何人もの将軍たちの

ほうが、ブオナパルテを凌いでいたかもしれない」上、すべてを調整し得るようなわずかな「節度」さへ欠いていたのだとすれば、「ひとりの篡奪者に、これほど果たすのに容易で輝かしい役割が与えられた試しは、一度としてなかった」という好機に恵まれたにもかかわらず、ブオナパルテは結局、「彼自身の狂気」に突き進んでいく他なかった。

1804年2月から3月に王党派の陰謀が発覚すると、ブオナパルテは首領たちを処刑、反ボナパルトの軍人モローMoreauを流刑、さらに、「人々の権利、正義、宗教、人間性」などのすべてを犯しつつ“最後のコンデ公”アンギャン公爵 Duc d'Enghien を処刑し、この「罪によって、人類の下に自ら身を落してしまった」。

この時のパリの人々の反応は次のようだった。

「パリでこの死刑の報が叫ばれるのが聞こえると、戦慄が走った。誰もそれを押し隠せなかった。ひとりのコルシカ人が、いかなる権利を以てフランスの最も純粹で美しい血を流したのか、と問題になった。あの男は、半分アフリカ人である自分の家族によって、絶滅させたばかりのあのフランスの家族の代わりができるかとも思っていたのか。」

Quand on entendit crier dans Paris l'arrêt de mort, il y eut un mouvement d'horreur que personne ne dissimula. On se demanda de quel droit un étranger venait de verser le plus beau comme le plus pur sang de la France. Croyait-il pouvoir remplacer par sa famille la famille qu'il venait d'éteindre?<sup>(28)</sup>

そもそも、「道徳的信条」を持つがゆえに、「廉潔で、揺るぎなく、勇敢な行政官たちや、誠実さでも才能でも評判高い指揮官たち」が「権力を受けとることを自らに禁じ」ていたところへ、「ルイ16世の冠をあえて押し戴こう」と「躍り出て」きた「コルシカ人」のブオナパルテが、「フランスの最も純粹で美しい血を流し」、「絶滅させた」とあっては、心情的にフ

ランス人たちが快く思うわけがない。政治状況の上では致し方ないと見えても、フランス人が、「半分アフリカ人である」家族から出てきた「コルシカ人」によって成された「フランスの最も純粋で美しい血」への凌辱を、易々と受け入れるはずはない。

ブオナパルテの行為に対しての、フランス人側の受け止め方をシャトーブリアンはこのように纏めている。

「どの国にもその国なりの悪徳はある。フランス人の悪徳は、しかし、裏切りや腹黒さや忘恩ではない。アンギャン公爵殺し、ピシュグリュ<sup>(29)</sup>への拷問と暗殺、スペイン戦争、法王の拘束などは、ブオナパルテの中にある、フランスにとって異質な性格を露わにするものだ。鎖の重さに打ちひしがれているにもかかわらず、不幸と栄光に対して共に敏感な我々は、アンギャン公爵やピシュグリュ、ジョルジュ<sup>(30)</sup>、モロー<sup>(31)</sup>のために泣き、サラゴス<sup>(32)</sup>に感嘆し、鎖に繋がれたローマ教皇<sup>(33)</sup>を称賛で包んだものだった。」

Chaque nation a ses vices. Ceux des Français ne sont pas la trahison, la noirceur et l'ingratitude. Le meurtre du duc d'Enghien, la torture et l'assassinat de Pichegru, la guerre d'Espagne et la captivité du pape, décèlent dans Buonaparte une nature étrangère à la France. Malgré le poids des chaînes dont nous étions accablés, sensibles aux malheurs autant qu'à la gloire, nous avons pleuré le duc d'Enghien, Pichegru, Georges et Moreau; nous avons admiré Saragosse et environné d'hommages un pontife chargé de fers.<sup>(34)</sup>

カドゥダル Georges Cadoudal ら王党派首領の逮捕と処刑は1804年2月から3月であり、アンギャン公爵処刑は3月20日だが、その後の進展は駆け足だった。

3月21日に民法典 Code civil 公布、27日にジョゼフ・ファーシェ Joseph

Fouché が、ブオナパルテに「世襲権力 le pouvoir héréditaire」<sup>(35)</sup> を与えるよう護憲元老院 Sénat conservateur に提案するが、皇帝ブオナパルテ擁立はフーシェの画策によって進んでいく。

翌日28日、護憲元老院が第一執政ボナパルトに、「貴公の栄光と同じく、不滅なるものとして仕事を仕上げるよう achever ouvrage en le rendant immortel comme votre gloire」<sup>(36)</sup> 要請する。5月3日、グレゴワール Grégoire、ヴォルネイ Volney、シェイエス Sieyès（またはシエース）ら三人の長老の反対があったものの、護憲元老院で、「ナポレオン・ボナパルトとその家族 à 《Napoléon Bonaparte et à sa famille》」<sup>(37)</sup> に託された世襲帝国政府（または帝国政体）樹立 l'établissement d'un gouvernement impérial héréditaire<sup>(38)</sup> を承認する請願が可決される。

その後、5月11日、護憲元老院決議 sénatus-consulte を出す準備委員会の10人のひとりにフーシェが選ばれ、護憲元老院決議で憲法修正と帝国創建が決まる。5月18日に《12年フロリアル28日の国家組織の基本に関する護憲元老院決議 Sénatus-consulte organique du 28 floréal an XII (18 mai 1804)》<sup>(39)</sup> が、修正憲法として出される。この第1編第1条には「共和国政府はひとりの皇帝に託される。皇帝はフランス人たちの皇帝の称号を持つ。正義は、皇帝が任じる吏員たちにより、皇帝の名において表現される。Le Gouvernement de la République est confié à un Empereur, qui prend le titre d'Empereur des Français. La justice se rend, au nom de l'Empereur, par les officiers qu'il institue.<sup>(40)</sup>」、第2条には「共和国の現第一執政ナポレオン・ボナパルトが、フランス人たちの皇帝である。Napoléon Bonaparte, Premier consul actuel de la République, est Empereur des Français.<sup>(41)</sup>」と書かれている。

シャトーブリアンは、「ブオナパルテは、ヴァンセンヌでの（アンギャン公爵の）暗殺が我々の間に引き起こした恐怖を利用し、意を決して王座に就いたのである。Bonaparte profita de l'épouvante que l'assassinat de Vincennes jeta parmi nous, pour franchir le dernier pas et s'asseoir sur



le trône.」と書いているが、そうした世情操作の面があったであろう一方、実行されて行ったスケジュールを見ると、処刑も含め、あらかじめ計画が作られていたと推測されうる。

いずれにしても、シャトーブリアンの記述による限り、皇帝の座に就こうとする頃のブオナパルテが強力な権力掌握を行っていく一方で、フランス人たちには、ブオナパルテに反対する心情がすでに強く発生し始めているか、あるいはその素地が生まれている、と見える。

しかし、この点については、シャトーブリアンの妻 Madame de Chateaubriand が残した記述に、別の興味深い見解が見られる。シャトーブリアン夫人の回想録『赤い手帖 *Cahier rouge*』にはこうある。

「アンギャン公爵の死の前、パリの良家の人々の殆どがボナパルトを大っぴらに批難していた。しかし、あの英雄が暗殺者に変わるや、すぐに王政主義者たちはボナパルトの次の間へと駆けつけた。3月21日から数か月が経つと、フランスにはもはや、ひとつしか世論はないとさえ思えるようになった。フォブール・サン＝ジェルマン faubourg Saint-Germain の幾つかのサロンで、戸をすっかり閉め切った中でなら、あえて嘲弄が囁かれることもあるという程度だった。それに加えて、虚栄というものが、恐怖による以上に、より一層の離脱を引き起こしていた。転向した人々は、強制されたからだと言い張っていたが、実際には、転向を強いられたのは、有名な人たちや重要な人たちだけだったらしい。誰もが、自分が重要で由緒正しいと見せようとして、わざわざ懇願して、無理に“強制”してもらっていたのだ」。(42)

シャトーブリアンの最大の協力者にして、つねに最大の実質的な批判者であり論駁者だったシャトーブリアン夫人の記録には、夫であるシャトーブリアンの思考法や表現法自体の欠陥を衝く鋭い批評性がある。シャトーブリアンの場合、ブオナパルテとフランス人を安易に截然と分けた上で、ブオナパルテには、革命から腐敗（／墮落／退廃）を引き継いで諸々の罪を犯しながら悪に急傾斜していくイメージを付与し、フランス人には、

「裏切りや腹黒さや忘恩」と無縁で「不幸と栄光に対してともに敏感」であるという手前味噌なイメージを付けてきていたが、シャトーブリアン夫人がここに記すフランスの「良家の人々」たちの「虚栄」の有様は、シャトーブリアンによるフランス人のイメージ作りを一気に突き崩しかねないリアリティーを持っている。

## 9 ブオナパルテの完成と独裁原理

「腐敗（／墮落／退廃）」の宴であるフランス革命を「発生基盤、母胎」として始まったブオナパルテの歩みは、アンギャン公爵らの処刑という「罪」や「悪徳」を含み込みつつ、自らの帝国創設に到達していく。この「帝国」こそがブオナパルテの身体そのものであり、完成形態となるのは言うまでもない。ブオナパルトそのもののこの「帝国」は、シャトーブリアンによれば、このように描かれる。

「こうして、王国の壮大なお祭り騒ぎが始まった。犯罪、圧制、隷属が、狂気とともに、同じ歩調で歩いていくのだ。あらゆる自由は息絶え、尊敬すべきあらゆる感情やあらゆる高邁な考え方は、国家に対する陰謀と見なされるようになった。徳性について語ろうものなら、不審がられてしまう。美しい行為を称賛するのは、君主に向けての侮辱となる。どの言葉の語義も変わってしまう。正統な君主たちのために戦った民衆は反乱者とされ、売国奴こそが忠実な臣下とされる。フランス全体が虚偽の帝国となるのだ。新聞、政治文書、演説、散文も韻文も、すべてが真実を偽装してしまう。雨が降ったと聞かされれば、じつは太陽が出ていたのだな、と確実にわかる。押し黙った人々の中を専制君主が歩けば、群衆の喝采の中を進んでいったと言われる。君主だけが唯一の目的となり、道徳は彼の気まぐれに仕え、義務は彼を褒めそやすためにあった。とりわけ、彼が間違いを仕出かしたり、罪を犯したりした時には、感嘆の叫びを上げる必要があ

る。文学者たちは脅され、この暴君を褒め讃えるよう強いられている。彼らは称賛の度合いについて妥協したり、変節する。戦闘での勝利を描く時などに紋切り型表現を使って誤魔化しつつ、その裏でようやく幾らか溜息をついたり、幾ばくか犯罪を告発したり、語るのを禁じられた真実を想起させたりできるかどうかだ。奴隷の焼印のように、ブオナバルテへの賛美を刻印しなければ、どんな本も陽の目を見ない。過去の作家たちの新版においては、征服者たちや隷従や専制に抵抗したあらゆる部分が検閲で削除される。これら同じ作家たちの本の中の、君主政や王たちについて語られている部分すべてを、かつて総裁政府は修正させようとしたものだったが、それと同様である。年鑑は注意深く吟味された。徴兵は、公教要理の中の教義の一カ条とされた。芸術においても同じような隷属がある。ブオナバルテはヤッフア<sup>(43)</sup>のペスト患者たちに毒を盛って殺したが、絵画には、勇気と人間味に張り切れんばかりの彼がペスト患者たちに触れている姿が描かれた。聖王ルイ9世が病人たちを癒した時はこのようではなく、心に染み入るような宗教的な信頼が、王の手に病人たちを向かわせたのである。さて、世論については、もう、なにをか言わんやだ。これは、毎朝好き勝手に決められることになっており、決めるのは君主でなければならぬ、といった方針になっている。ブオナバルテが完成させた警察の中には、世の風潮に方向を与えるのを任務とする委員会があり、この委員会のトップには世論局長というのがいた。ペテンとダンマリ。このふたつが、民衆を謬見の中に置き続けるのに使われた一大手法だった。」

Alors commencèrent les grandes saturnales de la royauté: les crimes, l'oppression, l'esclavage marchèrent d'un pas égal avec la folie. Toute liberté expire, tout sentiment honorable, toute pensée généreuse, deviennent des conspirations contre l'Etat. Si on parle de vertu, on est suspect; louer une belle action, c'est une injure faite au prince. Les mots changent d'acception: un peuple qui combat pour ses souverains légitimes est un peuple rebelle; un traître est un sujet fidèle; la France

entière devient l'empire du mensonge: journaux, pamphlets, discours, prose et vers, tout déguise la vérité. S'il a fait de la pluie, on assure qu'il a fait du soleil; si le tyran s'est promené au milieu du peuple muet, il s'est avancé, dit-on, au milieu des acclamations de la foule. Le but unique, c'est le prince: la morale consiste à se dévouer à ses caprices, le devoir à le louer. Il faut surtout se récrier d'admiration lorsqu'il a fait une faute ou commis un crime. Les gens de lettres sont forcés par des menaces à célébrer le despote. Ils composaient, ils capitulaient sur le degré de la louange: heureux quand, au prix de quelques lieux communs sur la gloire des armes, ils avaient acheté le droit de pousser quelques soupirs, de dénoncer quelques crimes, de rappeler quelques vérités proscrites! Aucun livre ne pouvait paraître sans être marqué de l'éloge de Buonaparte, comme du timbre de l'esclavage; dans les nouvelles éditions des anciens auteurs, la censure faisait retrancher tous les passages contre les conquérants, la servitude et la tyrannie, comme le Directoire avait eu dessein de faire corriger dans les mêmes auteurs tout ce qui parlait de la monarchie et des rois. Les almanachs étaient examinés avec soin; et la conscription forma un article de foi dans le catéchisme. Dans les arts, même servitude: Buonaparte empoisonne les pestiférés de Jaffa; on fait un tableau qui le représente touchant, par excès de courage et d'humanité, ces mêmes pestiférés. Ce n'était pas ainsi que saint Louis guérissait les malades qu'une confiance touchante et religieuse présentait à ses mains royales. Au reste, ne parlez point d'opinion publique: la maxime est que le souverain doit en disposer chaque matin. Il y avait à la police perfectionnée par Buonaparte un comité chargé de donner la direction aux esprits, et à la tête de ce comité un directeur de l'opinion publique. L'imposture et le silence étaient les deux grands moyens employés pour tenir le peuple dans l'erreur.<sup>(44)</sup>

ブオナルテにとって至高のものであるこうした社会を永續させるために、徹底した計算の元に児童教育も行われる。子供たちを親から引き離して、「太鼓の音とともに、無信仰、遊蕩、家庭的美德の軽蔑、君主への盲目的服従 au son du tambour, ils devenaient irrégieux, débauchés, contempteurs des vertus domestiques」<sup>(45)</sup> が教え込まれる。

子供たちばかりにでなく、社会の各層の家庭にも、「無信仰、財産を超えた悦楽と浪費への好み、道徳的束縛の軽蔑、行き当たりばったりで暴力的で専横的な精神 L'irrégion, le goût des jouissances et des dépenses au-dessus de la fortune, le mépris des liens moraux, l'esprit d'aventure, de violence et de domination」<sup>(46)</sup> がゆき渡っていく。

結局、革命から総裁政府時代、執政政府時代を経て、ブオナルテ帝国に至った結果、至高の社会原理となったのは、独裁政治 despotisme<sup>(47)</sup> だった。

「独裁政治が原理とされる政府がもたらす苦痛を、どう癒したらよいというのか。この政府は、道徳と宗教についてばかり語りながら、自らの制度と軽蔑とによって、絶えず道徳と宗教を破壊していたのだ。秩序を、義務と法の上に打ち立てようとは全くせず、力と警察のスパイの上に打ち立てようとしていた。父祖の慣習に忠実な、よく組織された、昔の美德の小径を静かに歩いて行こうとするような社会の平和というものを、この政府は、茫然自失した隷属状態と見なしていた。最も恐ろしい革命でさえ、こうした状態よりは望ましい。なるほど、革命における内戦は社会の中に犯罪を作り出してしまうが、それは少なくとも、個人的な徳性や才能や大人物たちを生み出すものでもある。どんな帝国も、独裁政治の中で姿を消していくものだ。あらゆる手段を濫用しつつ、肉体を殺す以上に魂をこそ殺しながら、独裁政治は、遅かれ早かれ、解体を引き起こし、他国による征服を呼び寄せる。自由な国が、市民の間の戦争によって滅びたという試しはない。自らの嵐によって押しひしがれる時があったとしても、国家はつ

ねに、いっそうの生气に溢れて立ち直ったものだ。」

Mais comment guérir la plaie faite par un gouvernement qui posait en principe le despotisme; qui, ne parlant que de morale et de religion, détruisait sans cesse la morale et la religion par ses institutions et ses mépris; qui ne cherchait point à fonder l'ordre sur le devoir et sur la loi, mais sur la force et sur les espions de police; qui prenait la stupeur de l'esclavage pour la paix d'une société bien organisée, fidèle aux coutumes de ses pères, et marchant en silence dans le sentier des antiques vertus. Les révolutions les plus terribles sont préférables à un pareil état. Si les guerres civiles produisent les crimes publics, elles enfantent au moins les vertus privées, les talents et les grands hommes. C'est dans le despotisme que disparaissent les empires: en abusant de tous les moyens, en tuant les âmes encore plus que les corps, il amène tôt ou tard la dissolution et la conquête. Il n'y a point d'exemple d'une nation libre qui ait péri par une guerre entre les citoyens; et toujours un Etat courbé sous ses propres orages s'est relevé plus florissant.<sup>(48)</sup>

シャトーブリアンはこの後、軍事から政治、行政、私生活などの個別の事象について、ブオナバルテのやり方を批判し続けていく。

とりわけ、フランス人たちに多くの悲劇をもたらした、フランス社会を根底から歪めることになった苛烈極まる徴兵制度や、戦争を社会の根底から自動的に拡大させていくような帝国のシステムの徹底、軍隊や農業における不条理、ブオナバルテの軍事能力や指揮能力の欠陥、数字偏重主義、大陸封鎖政策の愚劣、スペイン戦争の失敗、ロシア侵攻における完膚なき敗北などについては、当時の著名人の立場としては初めての、執拗な本格的な批判が行われていく。

本稿では、ブオナバルテの出現や形成についての、シャトーブリアンによる原理論的記述の検討を目的としたので、それらの個別事象について

は、稿を改めて検討することとしたいが、1814年時点ですでに、時代の大現象としてのブオナバルテ検討のため、知識人たちの間でこのような抽象的な思索が始まっていたことは、確認できたと考える。

注

- (1) Herbert Lottman, *L'écrivain engagé et ses ambivalences, De Chateaubriand à Malraux*, Odile Jacob, 2003., p. 115.
- (2) シャトーブリアン自身は、この文書の序文では「ウヴラージュouvrage (著作、作品、書物、仕事)」と呼んでいる。B.B., p. 59 や p. 63 参照。  
また、後年の『墓の彼方からの回想 *Mémoires d'outre-tombe*』の中では「プロシユール brochure (仮綴じの小冊子、パンフレット)」と呼んでいる。M.O.T.I, pp. 855-857, や pp. 867-875 参照。
- (3) 第1版の序文に「この著作は三四ヶ月前に書き始めていた (J'avais commencé cet ouvrage, il y a trois ou quatre mois)」とある。B.B. p. 59 参照。
- (4) M.O.T.I, p. 856.
- (5) M.O.T.I, p. 856.
- (6) フランス国境を、ピレネー、アルプス、ライン河に置こうとする国境理論。ルイ14世 Louis XIV 以来、フランス外交政策の底流を成してきた。ルイ14世は「自然国境説」を唱え、ライン西岸の領有を主張、ドイツを支配する神聖ローマ帝国と対立した。北東部への侵略戦争を続け、1697年のライプシヒク条約 *Traité de Ryswick* でアルザス地方をフランスに併合した。
- (7) M.O.T.I, p. 857.
- (8) M.O.T.I, p. 527.
- (9) 服部春彦／谷川稔編著『フランス近代史』—ブルボン王朝から第五共和政へ—、ミネルヴァ書房、1993、p. 75。
- (10) 同書、p. 75。
- (11) 同書、p. 75。
- (12) Chateaubriand, *Grands écrits politiques I*, présentation et notes par Jean-Paul Clément, Imprimerie Nationale, 1993, p. 65。以下、B.B. と略述。
- (13) *Ibid.*, p. 66.
- (14) B.B., pp. 65-66.
- (15) B.B., p. 66.
- (16) Albert Soboul, *La Révolution française*, Gallimard, « tel », 1981, 1982, p. 382.

- (17) 澁澤龍彦『恐怖の大天使』in『異端の肖像』、河出文庫、1983、p. 150。
- (18) B.B., p66.
- (19) B.B., p66.
- (20) B.B., p90.
- (21) ジョージ・モンク George Monk, 1608-1670。クロムウェル Oliver Cromwell 死後のスコットランドを治めたイギリスの将軍。共和主義者と表明しながら、王政の復興を模索した。シャトーブリアンは自著『スチュアート朝の四人 *Les Quatres Starts*』の中でこの人物に触れている。
- (22) B.B., p. 90.
- (23) B.B., p. 89.
- (24) 近代の唯物論も観念論も「近代の機械論的世界像を共通の土俵としている」と見る今村仁司の発想は、ブオナパルテの思考法にも適用できるだろう。今村仁司『近代性の構造』（講談社選書メチエ1）、p. 130-132参照。
- (25) B.B., p 85.
- (26) B.B., p 79. 《*La politique, c'est jouer aux hommes.*》
- (27) B.B., pp. 67-68.
- (28) B.B., p. 69.
- (29) シャルル・ピシュグリュ Charles Pichegru, 1761-1804, フランスの将軍。アメリカでの戦争に参加後、ライン川の戦闘では指揮官としてネーデルラントとオランダ・ホーランド州を占領。1795年、パリ守備隊長。王政主義者の大義に賛同し、五百人会議 Conseil des Cinq-cents メンバーとなる(1797)。フリュクティドール fructidor 18日後、ギアナ Guyane に国外追放。逃亡してイギリスに上陸し、1804年フランスに潜入。ボナパルトへの陰謀をカドゥアルと画策、逮捕。1804年4月6日、牢獄で絞殺体として発見される。
- (30) ジョルジュ・カドゥダル Georges Cadoudal, 1771-1804, ふくろう党 Chouans の指導者の一人で、ヴァンデ Vendée の戦いに参加。1800年にロンドン亡命、アルトワ伯爵 comte d'Artois から副指揮官を任じられた。ボナパルトに対し、二度陰謀を企てた。1800年12月24日、サン＝ニケーズ Saint-Nicaise 通りの仕掛け爆弾 machine infernale で、オペラ座に向かうボナパルトを狙い、22人の死者を出す。ピシュグリュと共謀した1803年のものは失敗。逮捕され、1804年6月25日処刑。
- (31) ジャン＝ヴィクトール・モロー Jean-Victor Moreau, 1763-1813, ブルターニュ Bretagne のモルレ Morlaix 出身の軍人。ボナパルトのライバル。レンヌ法律学校学監。ピシュグリュやカドゥダルと反ボナパルトの陰謀を



- 企て、逮捕。禁固2年の後、ボナパルトによってアメリカ流刑。1813年ヨーロッパに戻り、ドイツで対仏諸国連合軍に加わる。ドレスデンの戦いで戦死。
- (32) サラゴサ Zaragoza。スペイン北東部の都市。ボナパルトのフランス軍は二度攻囲したが、住民の激しい抵抗戦で断念。この時の戦いで55,000人の人口は12,000人に減少。
- (33) 1808年、ボナパルトが教皇領の諸港とローマを占領した際、教皇ピウス7世 Pie VII (1742-1823) はこれに抗議、破門を示唆。教皇は捕えられ、サヴォナ Savona に送還 (1809)。その後、ボナパルトは教皇教書を差し押さえ、教皇を捕虜扱いし、フォンテーヌブローに送還 (1812)。教皇とのこの抗争はボナパルトとオーストリアとの決裂を準備した。
- (34) B.B., p. 70.
- (35) Emmanuel de Waresquiel, *Fouché Les silences de la pieuvre*, Tallandier/fayard, 2014, p. 399.
- (36) Ibid., p. 399.
- (37) Ibid., p. 400.
- (38) Ibid., p. 400.
- (39) Stéphan Rials, *Textes constitutionnels français*, puf, « Que sais-je? », 1982, p. 32.
- (40) Ibid., p. 32.
- (41) Ibid., p. 32.
- (42) B.B., p. 115., 註25。
- (43) ヤッファ Jaffa。現在のイスラエルのテル・アヴィヴ Tel-Aviv 地区にある港町。地中海を見下ろす岬に造られ、4000年の歴史を持つ。ボナパルトが攻囲し占領したが、ペストの発生により多くの駐留フランス兵がここで死んだ。
- (44) B.B., pp. 71-72.
- (45) B.B., p. 72.
- (46) B.B., p. 73.
- (47) B.B., p. 73.
- (48) B.B., p. 73.

#### 主な参考文献

- ・ Chateaubriand, *De Buonaparte, des Bourbons, et de la nécessité de se rallier à nos princes légitimes, pour le bonheur de la France et celui de l'Europe*, in

- Grands écrits politiques* I, présentation et notes par Jean-Paul Clément, Imprimerie Nationale, 1993. [註では B.B. と略述]
- ・ Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe* I, II. Editon par Maurice Levaillant et Georges Moulinier, Gallimard, Pléiade, 1951. [註では M.O.T. と略述]
  - ・ Chateaubriand, *Essai sur les révolutions, Génie du christianisme.*, Editon par Maurice Regard, Gallimard, Pléiade, 1978.
  - ・ Jacques-Alain de Sédouy, *Chateaubriand Un diplomate insolite*, Perrin, 1992.
  - ・ Ghislain de Diesbach, *Chateaubriand*, Perrin, 1995.
  - ・ Jean-Paul Clément, *Chateaubriand*, Flammarion, 1998.
  - ・ Jean-Paul Clément, *Chateaubriand « Des illusions contre des souvenirs »,* Découvertes Gallimard, 2003.
  - ・ Jean-Claude Berchet, *Chateaubriand*, Gallimard, Biographies nrf, 2012.
  - ・ Herbert Lottman, *L'écrivain engagé et ses ambivalences, De Chateaubriand à Malraux*, Odile Jacob, 2003.
  - ・ Béatrice Didier, *Chateaubriand*, ellipses, 1999.
  - ・ M. Villemain, *M. de Chateaubriand, sa vie, ses écrits, son influence littéraire et politique sur son temps*, Michel Lévy Frères, 1858.
  - ・ Albert Soboul, *La Révolution française*, Gallimard, « tel », 1981, 1982.
  - ・ Emmanuel de Waresquiel et Benoît Yvert, *Histoire de la Restauration 1814-1830*, Perrin, collection tempus, 1996 et 2002.
  - ・ Francis Démier, *La France de la Restauration (1814-1830)*, Gallimard, folio histoire, 2012.
  - ・ Aurélien Lignereux, *L'Empire des Français 1799-1815*, « La France contemporaine 1 », Edition du Seuil, 2012.
  - ・ Bertrand Goujon, *Monarchies postrévolutionnaires 1814-1848*, « La France contemporaine 2 », Edition du Seuil, 2012.
  - ・ Jean-Marie Rouart, *Napoléon ou La destinée*, Gallimard, folio, 2012.
  - ・ Emmanuel de Waresquiel, *Fouché Les silences de la pieuvre*, Tallandier/fayard, 2014.
  - ・ Stéphan Rials, *Textes constitutionnels français*, puf, « Que sais-je? », 1982.
  - ・ Maurice Duverger, *Les constitutions de la France*, puf, « Que sais-je? », 1944.
  - ・ 服部春彦／谷川稔編著『フランス近代史』—ブルボン王朝から第五共和政

- へー、ミネルヴァ書房、1993.
- ・ジェフリー・エリス『ナポレオン帝国』、杉本淑彦・中山俊訳、岩波書店、2008.
  - ・ティエリー・レンツ『ナポレオンの生涯』、遠藤ゆかり訳、福井憲彦監修、創元社、1999.
  - ・五十嵐武士／福井憲彦『アメリカとフランスの革命』、中公文庫、世界の歴史21、2008.
  - ・井上幸治責任編集『世界の歴史12 ブルジョワの世紀』、中公文庫、1975.
  - ・佐々木真『フランスの歴史』、河出書房新社、2011.
  - ・奥島孝康・中村紘一編『フランスの政治』、早稲田大学出版部、1993.
  - ・下津清太郎『ブルボン家』、近藤出版社、1984.
  - ・アンリ・カルヴェ『ナポレオン』、井上幸治訳、白水社、1966.
  - ・岡本明『ナポレオン体制への道』、ミネルヴァ書房、1992.
  - ・専修大学人文科学研究所編『フランス革命とナポレオン』、未来社、1998.
  - ・木崎喜代治『マルゼルブ フランス一八世紀の一貴族の肖像』、岩波書店、1986.